

近藤英俊氏の書評へのリプライ

浜本 満

はじめに、コンパクトさを目指しながらそれに残念ながら失敗したと言わざるを得ない拙著『信念の呪縛—ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』を、辛抱強く読んで書評していただいたこと自体に、心から感謝したい。冒頭部のホメ殺しとも見まごう高い御評価の連続に、逆に穴があったら入りたいような気持ちになりながら読み進めさせていただいた。

近藤氏による拙著についての書評は、単なる書評と呼ぶには、その長大さと独創性によって型破りなものとなっている。第1部の拙著の要約的介绍の部分は、要領よく簡潔でありながら細部にまで触れたもので、これを読めばもう本書そのものを読む必要がないのではないかと読者が感じたとしても無理はないほどである（もちろん、そうは言わずに、オリジナルにも目を通していただけると著者としてはありがたい。もしかしたら良いことがあるかもしれないと、いちおうお誘いをかけておこう）。

しかしこの書評の真に型破りで独創的な点は、第2部にある。そこで近藤氏は妖術の語りとそれが絡めとる現実、ともにそなわる「特性」を主題化した独自の考察を展開している。それは本書での私の議論の不備を補うものともなっている。近藤氏が言うように「妖術の筋書が現実構成的秩序から逸脱した不可解な事態に向けられたものであることが指摘されながらも、それが物語のあり方にどのような特性をもたらしめているのか、物語と不可解な事態のあいだにどのような相関関係があるのかは、本書の中心的課題を構成していない」からである。

この指摘は確かに当たっているのだが、私はそれではっとさせられると同時に、愕然とする思いにもとらえられた。というのは、私の妖術研究の出発点は、不幸について語る物語装置としての妖術の特殊な性格と、それによって語られる現実との関係に関するものだったからだ。1989年の「不幸の出来事—不幸の語りにおける「原因」と「非原因」」と題した論考の中で、私は、有名なザンデのマンガ（mangu）や、イアトゥムのングランビ（ngglambi）といった「災因論的」な観念のあるものについて、それらが出来事の経緯の一要素となりうる「原因」の一種ではなく、出来事の経緯の示す相貌・表情の異常

性をマークする記号であると論じた〔浜本 1989〕。それは、ちょうど表情がそれを構成する個々の筋肉のレベルではみて取られず、それら個々の筋肉が作る動きとパターンとして、それらのうちにみて取られるように、こうした観念は、出来事の経緯の要素としてではなく、それらの経緯のパターンの中にみて取られるものが、同時に外在する「物」であるかのように考えられたもの、つまり論理階型の異なるレベルの癒着がもたらす物象化の一形態なのだと¹。現実の中に人は、不思議な符合や驚くべき経緯、事の成り行きの異様さをみて取るのだが、そうした現実の成り行きが見せる表情は、こうした特殊な「災因論的」観念によってはじめて支えられている。その観念・物語筋書きにいざなわれて、人々は現実の中の怪しい符合や不思議な経緯に目を向けるのだが、逆にそうした不思議な符合や経緯に気づかざるを得ないことが、そうした物語の正しさの裏づけとなる。つまりそれは現実のみにて取られる異様な相貌を支える「空虚な」中心・焦点として働き、かくして、この種の災因論的物語は、反照規定的な自己循環の構造をもってしまうという議論である。

この観点を捨てたわけではないし、妖術の物語について議論した章では部分的に援用しているのだが、今回のドゥルマの妖術をめぐる実践と語りについての民族誌の中心には、たしかにすえていない。それはドゥルマの妖術の中心概念であるムハッソの顕著な物質性が、空虚な中心（それでも「空虚」であることは確かなのだが）というには存在感がありすぎるため、それを乗り越えて議論するのが難しそうに見えたことと、私自身がドゥルマの人々の妖術による物語にあまりにも馴染みすぎていて、そうした語りの異様さがかつてほど異様とは感じられなくなっていたことも影響している。背景に退いてしまったという以上に、ほとんど見えなくなっていたのかもしれない。

近藤氏のこのとてつもない書評は、私が半ば置き去りにしてきたこの問題系に、思いがけない角度から新たな光を当てるものであった。それも、はるかに理論的にすっきりと整理された形で。というわけで、近藤氏の書評にはおおいに感謝せざるをえない。書評を受けてこれほどありがたく思ったのも、実に久しぶりのことである。

<参考文献>

- 浜本 満 1989 「不幸の出来事——不幸の語りにおける「原因」と「非原因」」吉田禎吾編『異文化の解説』平河出版、pp. 55-92（草稿バージョン <http://members.jcom.home.ne.jp/mi-hamamoto/research/published/hirakawa.html>）
- 2006 「物象化論とその射程再考——マルクス・廣松渉・柄谷行人」（未刊行）（<http://members.jcom.home.ne.jp/mi-hamamoto/research/workingpaper/reification3.html>）

1 論理階型の異なる水準の癒着として「物象化」をとらえる議論は、のちに未発表の草稿の形でまとめている〔浜本 2006〕。